The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 第4号発刊に寄せて |
| Author(s) | 中島, 和子 |
| Citation | 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2008, 4, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/24996 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 第４号発刊に寄せて

母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究は2003年に有志が始めた研究会ですが、はや5年が経ちました。2004年にプレ創刊号、2005年に『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』紀要創刊号を発刊し、その後、第２号（2006）、第３号（2007）と順調に進み、今年も第４号を皆さまにお送りする運びとなりました。紀要の発刊には、人的資源においてもまた財政的基盤においても、なみなみならぬ水面下の努力が必要なので、会として第四号が無事出版できることは、ことのほかうれしく、また大変誇らしく思います。

これまでの紀要は、年次大会で取り上げたテーマの延長線で、紀要にもテーマを設けて一般募集をして来ました。第２号のテーマは「学校教育の中における２言語リテラシー・読解力の育成」、第３号は「ダブル・リミテッド/一時的セミリンガル現象」でした。今年は趣向を変えて、特定のテーマを設けずに母語・継承語・バイリンガル教育と関係のある研究論文を一般公募しました。その結果、国内ばかりでなく海外からも多数の応募を得ましたが、審査の上採択されたのが前半に掲載された二つの論文です。いずれも大学院生の力作で、この分野で確実に若い人材が育っていることが実感できます。後半の二つは、例年に従い、夏の年次大会で取り上げたテーマの１つである、言語分析の方法に焦点を当てて、論文にまとめていただいたものです。

MHBがこれまで取り上げてきた研究領域は、大きく分けると①第一言語、第二言語の習得・後退過程の分析、それにまつわる②心理的・社会的・文化的諸要因の解明、③二言語育成に関するプログラム・教授方法の評価分析になります。この観点から見て、論文１の櫻井千穂さんの「外国人児童の学びを促す在籍学級の在り方-母語力と日本語力の伸長を目指して－」は、①と③に関するものです。国内の外国人児童生徒への支援は、日本語習得のための個別支援や取り出し授業を中心に実践・研究が行われてきましたが、櫻井さんは、在籍学級と日本人児童生徒の役割に注目し、その関わりの中で一児童（スペイン語母語話者）の言語習得過程を分析したものです。論文２の穆紅さんの「二言語環境下の中国人児童生徒の母語保持要因－母語の認知面に注目して－」は②に関するもので、第一言語(会話力)の後退・伸長と年齢要因、接触度（滞在年数）、接触の質（母語保持努力）との関係について中国人児童生徒52名を対象に調査したものです。

論文３の清田淳子さんの「学習支援としての日本語指導を研究するために」は、①

に関するものです。L1/L2「相互育成学習」モデルに基づく個別指導の中で、どのように一個人の言語変容を捉えるか、書く力、(国語の) 内容理解、母語力を取り上げて、事例研究の方法を示したものです。論文4の湯川笑子さんほかの「日本人小学生の英語コミュニケーション能力」は、③に関するものです。小学生1084人、中学生514人という大規模調査で、小学校で英語力がどのぐらい、またどのような質の英語力が習得されているかを独自の評価ツールを開発して調べたものです。2言語育成とまでは行きませんが、小学校における英語の必修化に向けて、時宜を得たものと言えましょう。

もう1つ、MHBが2007年から始めた取り組みがあります。それは有志が分担して専門書を読み合い、話し合いを通して専門的知識を深める努力です。2007年はろう教育で読書会が始まり、2008年はバイリンガル教育で始まっています。本紀要には、ろう教育の読書会で取り上げた『Advances in the sign language development of deaf children』(2006) の分担発表者の書評が掲載されています。手話と日本語の組み合わせで、日本初のバイリンガル・バイカルチュラル私立校 (明晴学園) が東京都の認可を受けて4月に発足するそうですが、紀要第3号の カミンズのろう教育に関する論文についで、継続してろう教育に関するものが掲載できたことは大変うれしいことです。

紀要第四号の編集・発刊には、大勢の会員が関わりました。海外での広報・審査では、企画担当理事のダグラス昌子先生 (カルフォルニア大学ロングビーチ校)、国内の広報・審査では、同じく企画担当理事の友澤昭江先生 (桃山学院大学)、副会長 (広報担当) の湯川笑子先生、そして編集は事務局担当理事の佐々木倫子先生が忙しいなか、献身的な努力をしてくださいました。諸先生方に感謝するとともに、この研究会誌が多くの方を勇気づけ、専門的知識を深める一助となり、それがいろいろな形で子どもたちに還元されることを願ってやみません。

母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会長

中島 和子

2008年3月